江東シネマフェスティバル

江東区の水辺に親しむ会 飯田 太郎

古石場文化センターでは毎年1月に江東シネマフェスティ バルを開催しています。深川で生まれた小津安二郎を記念 する催しも今年で5回を重ね、遠くから泊りがけで来場する 人もいるほど、映画ファンの間に定着しています。江東区の 水辺に親しむ会も協賛団体としてお弁当やコーヒーを販売、 スタッフは常連の参加者たちと1年ぶりに再会しました。

今年は東日本大震災からの復興支援を意識したのでしょう 「フラガール」で幕を開けました。文化センターでフラダン スを学ぶ女性たちが日頃の練習の成果を披露したあと、エネ ルギー政策の転換で閉鎖に追い込まれた炭鉱の街を華やかに 再生した少女たちの物語を上映。この映画で広く知られるよ うになったフラガールたちは、ステージが復興するまで全国 で公演し被災地への支援を呼びかけたそうです。



初日の2本目は敗戦直後の昭和21年の正月映画として制作された「東京五人男」。焼け野原になった東京を、役所 に頼らず自分たちの力で復興しようと奮闘する人たちを、コミカルに描いています。

観客の多くは中高年、閉山や敗戦といった大きな困難に挫けない活力を、みんなが共有していた青春時代を思い 出し、しばし感慨にふけったのは私だけではなかったはずです。

お知らせ

水彩サロン2012春学期 「水辺とエネルギー」





- 1回目 5月20日 14:00~16:00 「船は発電所」 刑部真弘さん(国立大学法人東京海洋大学海洋工学部教授)
- 2回目 6月24日 14:00~16:00 「源流の森を守る一木質バイオマス」 土屋信之さん(市民防災まちづくり塾かたりべ)
- 3回目 7月22日 14:00~16:00 「川崎臨海部のまちづくりとメガソーラー」 高橋友弘さん (川崎市総合企画局神奈川口・臨海推進整備室 担当課長)
- ◎4月14日には利根川・渡良瀬遊水地への草刈遠足、6月2日に は総会があります。ぜひご参加下さい。

江東区の水辺に親しむ会 会報「みずべ」27号 発行日/平成24年 3月1日 発行/特定非営利活動法人 江東区の水辺に親しむ会 〒135-0021 東京都江東区白河1-3-13-106 連絡先/Tel,03-5639-2818 Fax,03-5639-2822 http://www.geocities.jp/mizubeland/



特定非営利活動法人 江東区の水辺に親しむ会 会報 2012年(平成24年) 3月1日発行



陶板の前で作家の話を聞く参加者の皆さん

_____ 道陶板は、粘土を焼き締めて作られており、長年 の風雨にも耐え、且つ風雨にさらされる毎に、そ の色味が美しく変化する。

この焼物の特徴を生かし江東区では、地域特性をテーマ にした絵柄陶板を、歩道にはめ込み快適な歩行者空間の創 出に努めてきた。この陶板は、歩行者に感動と潤いを与え る芸術作品、まさに「陶板アート」となっている。

当NPOは、平成23年12月4日、森下文化センター主催 の「森下アートパレット2011企画」に参加した。参加者12 人一組で、高橋商店街通り、現代美術館通り等の森下地区 周辺に設置されている歩道陶板を、担当作家三人から創作 意図を聞きながら検証を兼ねて歩いた。以下、参加者から 囁かれた言葉の一部を紹介する。

- ■「本陶板は設置して約25年経つが、設置当初より色合い が落ち着いてきている」、「沿道住民から直接絶賛された ことは最高の喜びであった」、「25年ぶりに我が子に会っ た思いだった」(作家)。
- 「日常気が付かなかったが、意識して歩くと素晴らしい」 「作家の説明を聞き楽しみが倍加された」、「陶板絵柄は、



水彩都市に相応しい」(参加者)。 ■ 「歩道陶板は心が癒され、大 胆なオリジナルな絵柄が好き」、 「区内全体の歩道陶板写真を見 たい」、「区も折角の歩道陶板、 しっかりと見守って欲しい」(沿 道住民)。

水をモチーフにした作品が多く、

「歩道工事の際、 陶板の取り外しが容 易になるよう接着面 を工夫する」、「地 域の人に、こんなに 喜ばれているとは判 らなかった」(区職

さらに、本イベン ト終了後に、別会場



で知人の女流作家三 小学生が描いた下絵から作られた陶

人に、当日のイベントをチラシと写真で説明し、感想を聞 くことが出来たので、要旨を参考までに追記する。

■「陶板写真を見たら現地に行きたくなった」、「行政が 区内全域に計画的に進めてきた所は全国的に珍しい」、「こ れを全国的に展開されると良い。観光客の外国人にもアピー ルされる」、「日常生活に密着した野外美術館である」(**女流**

考察としては、地域の住民の声は、苦情だけが行政に上 がるが、良いことは当然であって行政には届かない。陶板 絵柄は、結果的に水をモチーフにした創作が多く、水彩都 市の特徴が伺える。今後、区内全域の陶板写真集を作成し たい。舞台装置は行政、踊り子は住民、両者をコーディネー トするのがNPOの役割、即ち、「協働」の良き事例と思

最後に一言:やって良かったという充実感。

江東区の水辺に親しむ会 坂口 清実

「江東デルタ」の安全・安心は先ず、足元を知ることから!

江東区の地盤秘話

講師:中山俊雄さん(元東京都土木技術研究所)

水彩サロン秋学期で「東京低地の地質・地盤の特徴と地盤沈下」というテーマでお話を伺った 中山さんに、江東区の地盤について書いていただきました。

江東区は、東京で最も新しい地盤に立地している。 江東区南部の戦前・戦後を通し造成された埋立地は言うに及ばす、約400年前の家康の入府頃の江東区(の場所)は、南は小名木川までであった。その南には広い海原が広がっていた。さらに平清盛が京で活躍していた約850年前頃、江東区は全域海の底にあった。

江東区はまた軟弱地盤地帯ともいわれている。軟弱 地盤とは、地盤を構成する地層の強度が小さく中高層 のビルのような重量構造物が載ると、破壊されてしま うような地盤のことである。このため江東区の中高層 ビルは地下に打ち込まれた杭により支えらえている。

それでは軟弱な地層はどのようなもので、江東区では 支持杭の長さはどれだけ必要なのだろうか?それには下 図の地質断面図が参考になる。この図は中央区日本橋か ら江東区南砂町に至る永代通り沿いの東西地質断面図(東 京都土木技術支援・人材育成センター提供)である。 横軸は深度(m)、図中の縦棒は地質調査ボーリング 柱状図である。これら地質柱状図をもとに地層区分が 行われている(有楽町層上部などなど)。江東区の地 下を代表する図である。

近年、これらの地層の形成された時期や堆積環境が徐々に明らかにされてきた。埋没段丘礫層(主に砂利層からなる)の形成は今から4~2万年前、同様に基底礫層(主に砂利層)は約2万年前(?)、七号地層(主に砂と泥からなり、その名は七号埋立地(辰巳町)から命名)の上部境界付近の年代は約1万年前、有楽町層下部(主に泥層)と有楽町層上部(主に砂層)の境界付近のそれは約2000~3000年前と推測されている。また、埋没段丘礫層や基底礫層はほとんど砂利からなり、これらは上流から川により運ばれてきた河原石であると推定され、七号地層の泥層からは汽水域の珪藻が多く含まれ、有楽町層下部の泥層では塩水域の珪藻が多く

日本橋駅から南砂町駅ルートの地盤



なり、さらに有楽町層上部からは再び汽水から淡水域 の珪藻が増えるなどの堆積環境が明らかにされている。 さて、これらのことを踏まえ、再びこの地質断面図を 見ると江東区地盤の秘話が読めてくる。

江東区(の場所)は、今から4~2万年前には陸地だったのである。この時の地球環境は今より寒く、氷河期であった。ヨーロッパ北部や北米大陸では厚い大陸氷河が発達し、その氷床分だけ海水面は低下していたのである。海水面の低下量は100m以上に及ぶといわれている。大陸棚のかなりの部分が地上に顔を出していたのである。このとき、江東区一帯は山の手台地と高さ40mの崖で接する広い河床平原であった。

2万年前頃になると、この広い平原をさらに下方浸食する深い河谷が形成された。この深い河谷の崖は、断面図では木場と東陽町間にあり、高さ40m、谷幅4km(対岸は江戸川区)にわたる大渓谷、江東グランドキャニオン(仮称)である。この谷にはナウマン象が闊歩し旧石器人が追いかけていたかも知れない。1.8万年前になると地球温暖化が始まる。江東グランドキャニオンにも徐々に南から海水が入り込み始めるようになる。1万年前頃には、この谷は完全に入り江となる。縄文人が漁を求めて江東区の西に住み着き始めたかもしれない。しかし、この海面上昇はますます進行し600年前頃にそのピークに達した。このとき、埼玉・栃



永代通り(木場から東陽町の方を眺める)

木県境付近まで広がる大東京湾が形成された。江東区は完全に水没し、上流から運ばれてきた泥砂を厚く堆積する場となっていた。この泥・砂が軟弱層である。その後、気候は冷涼化し海水面も徐々に低下しはじめ、大東京湾も上流(北から)徐々に三角州が発達し海は徐々に埋められていくようになる。2000年前頃になると、新しく干上がった土地に弥生人が漁を水田を求め移り住み始めるようになり、時代は歴史時代へと引き継がれていく。

江東区には縄文文化や弥生文化が開花したことはないが、旧石器人やナウマン象が住み着いていた可能性は秘められているのである。

水彩サロン感想

明治学院大学3年 村井貴中

今回の水彩サロンは船に乗り、実際にどのような設備が水害から我々の生活を守っているのか、また水害にあってしまった場合私たちはどのような対処をすればいいのかを見るという内容で行われた。

実際に船から眺めてみると、東京という都市がいかに「水」の豊かな都市であるかを教えられた。私の住む川崎市も県境に多摩川や市内に二ヶ嶺用水といった「水」があるが生活者にとってあまり身近とは言えない。しかし江東区を始めとした東京の街中には水路があり、マンションの目の前に「水」があり、それを無視して生活は出来ない。昨年の津波による被害を目の当たりにしただけにその思いは強まる。



新砂水門

そんな状況下で、水害対策の実態と自らが巻き込まれた場合の対処法を講義していただいた今回の水彩サロンは非常に有意義なものであったと感じている。

また講義内容とは関係がないが、観光クルージングとしても東京都を海・川・水路から眺めるというのは非常に魅力的な内容であった。天候にも恵まれ、直前まで参加を悩んだ自分に「参加してよかったじゃないか」と言いたくなったほどであった。